第一〇六回　日本医史学会　総会　演題目次

招待講演Ⅰ

北里柴三郎と適塾 …… 芝　哲夫 …… 一四五

招待講演Ⅱ

三宅　秀とその周辺 …… 佐々木　恭之助 …… 一四八

特別講演

日本漢方の伝統 …… 花輪　壽彦 …… 一五〇

シンポジウムⅠ「江戸のモノづくり」における医史学研究――拡充と越境

1　器物・文献資料総合データベースを用いた医史学研究の試み …… 月澤　美代子 …… 一五八

2　岡山県邑久郡中島家史料調査報告（一） …… 中山学・黒澤学・酒井シヅ …… 一六〇

3　明治期の医療器械商――大阪の白井松之助について …… ヴォルフガング　ミヒェル・遠藤次郎・中村輝子 …… 一六二

4　北條家（佐渡市）の薬箱の検討 …… 遠藤次郎・中村輝子・ヴォルフガング　ミヒェル …… 一六四

5　新宮凉庭の薬箱の検討 …… 中村輝子・遠藤次郎・ヴォルフガング　ミヒェル …… 一六六

6　曲直瀬養安院文書の研究（一）――家系と肖像 …… 町泉寿郎・小曽戸洋・花輪壽彦 …… 一六九

7　曲直瀬養安院文書の研究（二）――文書の概要（上） …… 小曽戸洋・友部和弘・町泉寿郎 …… 一七一

8　曲直瀬養安院文書の研究（三）――文書の概要（下） …… 友部和弘・町泉寿郎・小曽戸洋 …… 一七三

シンポジウムⅡ　人をみる医師を育てる――医学史・医哲学を現代の医学教育に生かす

1　医学教育の流れ …… 福島　統 …… 一七五

2　医のこころを先人の足跡と社会に学ぶ …… 相川　忠臣 …… 一七七

一般演題

1　収蔵楢林外科書とパレ（一六二七）及びスクレテタス（一六五七）との絵図における比較 …… 田中　祐尾 …… 一八〇

2 大江玄仙の栗崎流金瘡外科免許状について……川嶌眞人・カトリーナ シバタ……一八二
3 高岡長崎家の『家方抄』について——宝永期からの蘭方外科医の繁用薬方集——……正橋 剛 二……一八四
4 杏蔭斎正骨要訣の校訂者和田謙堂の家系と同書の成立年代……蒲原 宏……一八六
5 「身幹儀」（星野木骨）の制作過程に関する研究……片岡 勝子……一八八
6 「乳巌治験録」をだれが書いたか……松木 明知……一九〇
7 「革谿医砭」（一八五四）にみる平野重誠の医療観……中村節子・平尾真知子……一九二
8 北里研究所東洋医学総合研究所所蔵多紀元堅書き込み入り『医賸』について……舘野 正美……一九四
9 関宿町桐ヶ作の眼科医 高野敬仲……青木 道夫……一九六
10 南小柿寧一とその家系……石原 力……一九八
11 江戸時代の「癩」と梅毒……鈴木 則子……二〇〇
12 江戸幕府の法定伝染病——疱瘡・麻疹・水痘——……川部 裕幸……二〇二
13 日本最古のマラソン競走 安政の遠足（トオアシ）……清水 英一……二〇四
14 ポンペ・ファン・メールデルフォールトの教えた近代臨床検査学……相川忠臣・酒井シヅ……二〇六
15 済生学舎開校前後の川上元治郎の手紙と報告書及び当時使われた教科書……岩崎一・殿崎正明・唐澤信安……二〇八
16 明治一二年に東京府病院が実施した医術開業旧試験について……樋口 輝雄……二一〇
17 格識順天堂医院手術傍観録……西井 易穂……二一二
18 一八八六年におけるリンダ・リチャーズの上海から京都への足跡……岡山寧子・依田和美……二一四
19 小野豊三郎の解剖学ノート……浦山 きか……二一六
20 私立日本医学校設立者・山根正次の医学教育の失敗……殿崎正明・唐沢信安・岩崎一……二一八
21 「マギー夫人来日」の記事にみられる高木兼寛の看護婦観——明治三七年『成医会月報』より——……芳賀佐和子・平尾真智子・蝦名總子……二三〇
22 近代日本におけるコレラの伝播（一）……鈴木 晃仁……二三二
23 近代日本におけるコレラの伝播（二）……永島 剛……二三四
24 近代日本におけるコレラの伝播（三）……市川 智生……二三六
25 コレラ禍と内務省の広報活動……笠原 英彦……二三八
26 ハンセン病および精神病の比較法制・処遇史……岡田 靖雄……二三〇

27 朝敵としての癩病……ベイ　アレキサンダー……二三三
28 細菌グラム染色の本邦における初期の紹介について……会田　恵……二三四
29 高峰譲吉いわく、私は適塾生だった……中山　沃……二三六
30 京都大学整形外科学講座初代教授　松岡道治先生の生涯……廣谷　速人……二三八
31 医僧・大日方大乗の略伝……中西　淳朗……二四〇
32 医学史家・小川政修……佐藤　裕……二四二
33 日本医師協会と小川劍三郎……寺畑　喜朔……二四四
34 『善那余話』からみたジェンナー画像収集の経緯……深瀬　泰旦……二四六
35 道教と中国医学（第二十五回）『功過格』……吉元　昭治……二四八
36 出土医書に見る「痔」の一考察……吉岡　広記……二五〇
37 『明堂』における足三里の主治病証……木場　由衣登……二五二
38 張文仲の鍼灸について……宮川　隆弘……二五四
39 南宋代の体系的脈状記載について……中川　俊之……二五六
40 疔瘡に対する松鍼法……上田　善信……二五八
41 中国のアヘン問題と岸田吟香の対応……丁　蕾……二六〇
42 『日本霊異記』の中の身体に関わる表現……計　良吉則……二六二
43 「大同医式」について（二）……後藤　志朗……二六四
44 吾妻鏡の鍼灸……寺川　華奈……二六六
45 「感冒」疾患名の起源について……木村　丹……二六八
46 安西流馬医伝書（安西流馬医絵巻）寛正五年（一四六四）の補遺……松尾　信一……二七〇
47 医聖永田徳本――その医術の位置づけとP．A．パラケルススとの対比を中心として……山田英雄・山内一信……二七二
48 十五年戦争と日本民族衛生学会（協会）（その三）――学会名等をめぐる戦後の論争――……莇　昭三……二七四
49 昭和十五年の監置精神病者……橋本　明……二七六
50 世界初の人を用いたランダム化比較試験は七三一部隊によるか？……津谷喜一郎……二七八
51 GHQ文書による占領期のハンセン病関係資料の研究（第二報：沖縄と大韓民国について）……杉田聡・丸井英二……二八〇

52 石川日出鶴丸博士とGHQ旋風　占領下における「鍼灸禁止令」事件が後世に与えた影響 ……奥津貴子……二八二
53 占領期の医療・看護に関する出版物の検閲（一）——プランゲ文庫所蔵『看護学雑誌』について ……大石杉乃・喜多加奈子・平尾真智子・芳賀佐和子……二八四
54 昭和二六年の結核予防法制定とBCG論争 ……渡部幹夫……二八六
55 精神科作業療法職の専門分化過程の考察（二）——昭和四〇年の法制定と旧従事者への影響 ……柳田純子……二八八
56 住民による健康増進活動の形成（二）——専門職による住民支援の方法 ……杉山章子……二九〇
57 ヴェサリウスの父アンドリエスの、皇帝カール五世による嫡出承認書 ……泉彪之助……二九二
58 近代初期解剖学書における筋の名称について ……澤井直……二九四
59 Thomas Willis の Cerebri Anatome で用いられた神経解剖学的な観察法の追体験 ……門田永治……二九六
60 『解剖学表』（『解体新書』の原著、いわゆる「ターヘルアナトミア」）異版の研究——第二報 ……石田純郎……二九八
61 ムーアフィールズ眼科病院の設立について ……柳澤波香……三〇〇
62 孤高の外科医ギョーム・デュピュイトラン男爵（一七七七—一八三五） ……小林晶……三〇二
63 コロトコフ音の発生理論 ……藤倉一郎……三〇四
64 大江医家史料館の開館について ……カトリーナ シバタ・川嶋眞人……三〇六
65 医史学関係資料の収集・保存・研究——ドキュメンテーション化の観点から事例に基づいて ……野尻佳与子・青木允夫……三〇八
66 ヒポクラテスの木・二〇〇五——文献、インターネットによる情報の収集 ……稲松孝思……三一〇

誌上発表

67 『長沙走馬楼三国呉簡・竹簡』と『傷寒論』 ……猪飼祥夫……三一二
68 「分等」から「等分」への変遷 ……郭秀梅……三一四
69 『口歯類要』の治療範囲 ……西巻明彦……三一六
70 甲賀通元『古今方彙』の検討 ……鈴木達彦・遠藤次郎・中村輝子……三一八
71 君臣佐使に関する東洞流の認識 ……水野洋子……三二〇
72 葦原検校の遺跡と木像について——『鍼道発秘』を著し、没落した木曽家再興を果たした生涯 ……大浦宏勝……三二二
73 『日本医譜』に記された脈診による天災予知 ……天野陽介・宮川浩也・小林健二・野澤隆幸……三二四

74 韓国現存古医籍の特徴……真柳　誠……三六
75 近代期の中国における平民教育運動――定県実験区における農民教育と衛生……三橋　かほり……三八
文庫めぐり
東京大学薬学図書館内・日本薬史学会文庫……山川　浩司……一九

《本号の表紙絵》

創立当時の北里研究所

北里柴三郎は大正3年（1914）伝染病研究所を辞職すると研究事業を継続し、国際競争に遅れないようにするため、新研究所を設立した。敷地は白金の土筆ヶ岡養生園敷地の空き地を当て、建物は1年を費やし、大正4年（1915）11月をもって完成。所員は国立伝染病研究所時代の職員で構成されていた。

敷地面積2500余坪、建物総面積772坪、総工費20余万円で、研究所設立の資金の内、30余万円は土筆ヶ岡養生園の収益を貯蓄していたものが充てられた。その他、伝染病研究所時代の講習生達の同窓会から4万8千円余が寄付され、かつて伝染病研究所や土筆ヶ岡養生園の設立時に多額の寄付をした森村市左衛門翁からも3千円、その他一般の人達からも多額の寄付が集まり、北里研究所の基金に加えられた。

研究所本館建物の外観はドイツ国立伝染病研究所（コッホの研究所）に似ており、正面にはオランダ切妻を配し、玄関ポーチの上面には太鼓の撥状の破傷風菌2個を交差させ、これを月桂樹で取り囲んだ北里研究所のマークが掲げられている。

この白金の地も第二次世界大戦時には激しい空襲に会い、養生園や病院等は消失したが、本館の建物だけは職員の必死の消火活動により辛うじて戦火を免れた。

建物の中心部分は昭和55年（1980）、現本館の新築を期に、愛知県犬山市の博物館明治村に移築され展示されている。（『生誕150年記念・北里柴三郎』北里研究所、2003より）　（小曽戸　洋）